

講義の風景

文学部

堀田隆 一准教授

Hotta Ryuichi

「英語史」

〔火曜2限〕

「なぜAを」と発音するのか」「英語が世界語となりえたのはどうしてか」英語を学んでいれば誰もが抱くであろう、こんな疑問を解決してくれる講義がある。それが、堀田隆一先生の「英語史」の授業だ。講義では、学生の英語史に対する興味を惹くために様々な工夫が凝らされており、暗記する事項が多いという定番の歴史の授業のイメージを払拭してくれる。

記者が昨年度、受講した際には、分かり易く丁寧な講義に感心させられた。今回、堀田先生が、突然の取材申し込みにもかかわらず、即座に快く応じてくれたのも、ひとつひとつの講義を大切に行っているからだろう。

疑問はリアクションペーパーで

火曜日2限、午前11時の定時に教室へ足を踏み入れると、机の上には、講義用のプリントが用意されていた。先生はすでに授業で使用する機材のセットを終えており、定刻通りに授業がスタート。早速、堀田先生なら

様々な工夫凝らして学生の興味惹く
分かり易く英語のルーツを辿る

ではの工夫がみられた。前回の授業終了時に配布されたリアクションペーパーに書かれた学生の感想や疑問に答える形で授業がはじまったのだ。

疑問点や理解できなかったことについて、リアクションペーパーであらためて説明を聞くことができるの

だから、学生にとってはありがたい。授業開始時にみられる講義の工夫は、このフィードバックに限らない。この日は、時事ニュースに触れながら、英語史の視点からの言及があった。

「アイスランドで、火山の噴火が



留学体験交え講義する堀田先生

起きましたが」。堀田先生は、1週間ほど前に発生したアイスランド南部エイヤフィヤトラヨークトル氷河の火山噴火について話を切り出した。ヨーロッパ各国を中心に空港閉鎖や航空便欠航という事態を生じさせている火山噴火のニュースを引き合いに出しながら、授業は英語史に

関連する内容へ移行していった。

英語に多大な影響与えた北歐語

「Tealantic（アイスランド語）とEnglish（英語）は、ゲルマン民族の言語として、文化や文学における共通性があり、同様の成立のルーツをもちます」。堀田先生は、北歐語と英語の関連性について説明をはじめた。千年前の時点では、西ゲルマン語の英語と北ゲルマン語であるアイスランド語は、類似しており、その差は方言程度であったという。「北歐語は現代英語の確立に、甚大な言語的影響を与えてきた」と前



置きして、先生は「8世紀から11世紀前半のヴァイキングによるイングランド侵略により、sheや、theyなどが英語に入ってきた」ということや、「北歐語は英語の人名、地名に

も大きく貢献しました。例えばsonは、息子の意で、JacksonはJackの子どもなどと具体的な例を紹介しながら説明した。また「現代英語は、古い文法を多く失ったのに対し、アイスランド語は、現在もその言語形態が千年前とあまり変化していない」という。その理由として、アイスランドが地理的に隔離されていることを挙げた。スクリーンに北欧を中心にした地図を映し出し、アイスランドの位置を確認し

「現代英語の特徴」がこの日のテーマ

ながら、先生は「比較言語学上、古英語と古アイスランド語の比較、対照は重要です」と強調した。この日の講義は「現代英語の特徴」が主題で、「現代英語はどんな言語か」「他の言語や古い英語と比較して、どこが異なるのか」といった点についてガイドラインが示されたうえで、授業は本題に入っていた。

350の輸入言語による現代英語

講義は、堀田先生の授業用ウェブサイトに掲載されるスライドに沿って行われる。学生はそれを印刷し、授業に臨む。このテキストには、学ぶポイントの項目ごとに空欄があり、聴講しながら学生が要点を書き込める仕様になっている。

「現代英語の特徴」については、慣用句に関する話に進んだ。英語を母語としない人にとって慣用句 (Idiomatic Expressions) は、その数の多さが頭を悩ませる。

「現代英語の単語は、350もの言語から輸入され、その数は約100万語にのぼる。英語の慣用句には、フランス語やラテン語の借用語の同義語が多く存在し、その半数以上を

占めます」と堀田先生。

また、「knight」という単語を「ナイト」と発音することについて言及。千年前の英語では、>は、「エイ」ではなく、「ア」と発音され、「knight」は「クニヒト」であったという。

この問題を考えるにあたって、先生は、>の綴りを含む単語を挙げて、その部分に対応する発音を指摘するよう学生に考えさせた。例えば「ghoulはこう発音するか」というクイズを出題し、イギリスの劇作家バーナード・ショウが訴えた英語の発音の改革にも触れた。ちなみに、「ghoul」の発音の答えは「フィッシュ」だそうである。

学生がリアクションペーパーに記入する時間を考慮して、定刻数分前になると、授業の締めくくりとして、次回以降の授業で扱う内容を説明し、講義は終了となった。

記者が数か月ぶりに聴講した英語史の講義は、相変わらず堀田先生の誠実さが感じられるものだった。授業のために毎日、更新されている「Halllog ~ 英語史ブログ」にもまた目を通したくなった。

(学生記者 鷲見直美 II 文学部3年)